

## 第1章

# アフガニスタンの国内事情： ターリバーン出現の背景

### 第1節 ターリバーン出現までの略史

アフガニスタンは世界でも最も貧しい国の一つである（資料1参照）後発発展途上国（LLDC）である同国の一人当たり国内総生産（GDP）は1979年時点で推定276ドルに過ぎず、その後は打ち続く内戦により更に悪化の一途を辿った（例えば1985年の一人当たりGDPは248ドル）全国平均識字率は10%（1979年）に過ぎない。

1973年、ザーヘル国王（Zaher Shah [ザーヒル国王 Zahir Shah と呼ばれる]）の従兄弟であったダーウッド（Daud）中央軍総司令官が世界に吹き荒れていた民主化の波に乗って「共和革命」なる政変を起こし、同国王はイタリアへ亡命した。1978年になると、軍の兵卒たちが政変を起こし、政治権力を社会主義思想家達に譲渡した。これが、「4月革命」（Saur Revolution）と言われる社会主義政変であった。

新政権はあまりに教条的な共産主義路線を採ろうとし、またソ連に対して必ずしも従順ではなかった。ソ連は自国の「柔らかい下腹」としての中央アジア地域にアフガニスタンの政治不安が波及するのを恐れ、当時のブレジネフ・ソ連共産党書記長は翌1979年12月にアフガニスタン軍事侵攻を行い、親ソ政権を樹立した。間もなくソ連・アフガニスタン政府と反共産政府ゲリラとの内戦<sup>1</sup>が発生した。これにより1989年頭現在の死者は150万に達し、また隣国パキスタンとイランに大量の

難民が流入し、その累積数は540万人<sup>2</sup>にも達していた。アフガニスタンとパキスタンとの国境沿いは「パシュトゥーン・ベルト」(Pashtun Belt [ Pakhtun Belt とも呼ばれる ]) と言われる(資料2参照)。それは、この地域がパシュトゥーン民族の居住地だからである。彼らはアフガニスタンとパキスタンの国境をまたいで居住している。パキスタン側の血縁者あるいは難民キャンプへ避難したパシュトゥーン人達は地域のマドラサ( Madrassah = モスクの神学校 [ アラビア語 ]) で学ぶとともに戦闘技術を習得してソ連・アフガニスタン政府連合軍に対する「聖戦」( Jihad ジハード) を戦った。アメリカの軍事・経済援助とパキスタン政府・軍の協力を受けた彼らムジャーヒディーン<sup>3</sup>は勝利を収めた。9年2カ月のアフガニスタン戦争に敗れたソ連軍は1989年2月、遂にアフガニスタンから全面撤退した。

ソ連軍撤退後もアフガニスタンでは親ソ派のナジーブッラー( Najibullah ) 政権が存続していた。しかしパキスタンを聖域としていた7派の元ムジャーヒディーンが1992年にアフガニスタンの首都カーブル( Kabul ) に入城し、新政権を樹立した。それから間もなく、大統領派と首相派の権力闘争が始まり、内戦へと発展していった。

群雄割拠する状況下で内乱が激化し、元ムジャーヒディーンは戦費調達のために匪賊化し、元ムジャーヒディーン<sup>4</sup>の戦闘はもはや「聖戦」とは言えなくなった。そのため民衆は彼らを「聖戦士」(ムジャーヒディーン) とは認めなくなった。そういう時に、世直しのためにターリバーン<sup>5</sup>が登場し、戦火に疲れ果てた庶民に大歓迎されたのである。彼らは決して「テロリスト」として登場したのではなかった。彼らはパキスタン軍・政府の支援の下に急速に勢力を拡大していった。

## 第2節 ターリバーンの政治

組織としてのターリバーンはアフガニスタン南部のカンダハール市でわずか数人のグループとして創設されたと言われる。創設者オマル( Omar ) 師<sup>6</sup>は厳格なイスラーム原理主義者として知られる。

ターリバーンは先ず、国内に平和と安全をもたらすためにイスラーム神聖国家を樹立すると宣言し、ターリバーンの最高指導者オマル師はアミールル・ムーミニー

ン（Amir ul Muminin = 信徒の長）に就任したと宣言した。彼の指導下にターリバーンは元ムジャーヒディーンの武装解除と解散を目指して「聖戦」を開始した。彼らは1996年9月に首都カブールを制圧した。首都に入城した彼らはイスラーム国家と暫定政権の樹立を宣言した。その後も彼らは支配地を拡大し、既に1997年5月には国土の90%を支配下に置いていた。

間もなく、同政権の政策が非常に厳格なものであることが判明した。ターリバーン政権は諸地域の軍閥を制圧して彼らの麻薬取引などを禁じ、違反者を公開処刑などの極刑に処した。その他、ターリバーンの厳しい治安維持政策により彼らの支配地域では治安が回復していった。

ターリバーン政権は「イスラーム神聖国家」樹立のため「シャリーア」(Shariah = イスラーム法)の厳格な施行を基本方針にしたが、具体的政策の詳細は不明である。ターリバーンがイスラーム法施行に当たって軍事力という強制手段を背景にシャリーア遵守を国民に強制してきたため、国民は間もなくその恐怖政治に怯え始めたと報じられるようになった。ターリバーンの採ってきた措置には次のようなものがある。

例えば、宗教省の「徳行推奨・悪行禁止局」(通称「宗教警察」)は歌舞音曲を禁じ、写真を禁じ、喫煙を禁じ、男性の長髪を禁じ、少女達の就学を禁じ、女性の家庭外労働(医療機関を含む)を原則として禁じた。違反者には公開鞭打ちなど過酷な刑罰が科された。ターリバーン政権が1996年9月、親ソ派であったナジーブッラー前大統領とその実弟を公開絞首刑に処し、遺体をしばらくはそのまま吊していたことはアフガニスタン国民だけでなく、世界を震撼させた。

ターリバーン政権の極めて厳格な政策は国民を怯えさせ、内外の人々の不安感を募らせた。ターリバーンの「イスラーム」政策のあり方は他のイスラーム諸国でも物議を醸すことになり、ターリバーンの自己流のイスラーム解釈が強く非難されることになった。

ターリバーン政権の経済運営に関しても明確には判明していないが、財源としては次のようなものが観察されている。まず、ターリバーン政権は、パキスタン、サウジアラビア、アラブ首長国連邦(UAE)など協力的な諸外国の経済的支援を受けてきた。また、ターリバーン政権は農民から「ケシ栽培税」とでもいうべきものを徴収しているという。「国連麻薬統制計画」(UNDCP)などの調査によると、ターリバーンはアフガニスタン国内のケシ栽培地の96%を支配下においているとい

う。初期のターリバーンの「世直し」の精神も「政権」運営の現実には色あせたようである。

(深町宏樹)

(注)

- <sup>1</sup> 筆者(深町)は社会主義アフガニスタン政府と反共産ゲリラとの内戦を「第1次内戦」と規定し、元反共ゲリラ同士の内戦を「第2次内戦」と規定する(巻末参考文献『アジアトレンド』第69号の深町稿参照)。1994年10月末にターリバーンが出現してからの内戦は「第3次内戦」と規定するのが適切であろう。
- <sup>2</sup> アハメド・ラシッド、「ビンラディンとタリバン「終わりなき戦い」」、『現代』2001年11月号、第28ページ。
- <sup>3</sup> ムジャーヒディーンMujahideen = ムジャーヒド Mujahid (聖戦士)の複数形。アラビア語。
- <sup>4</sup> 「カブール」と呼ばれることが多いが、カーブルが正しい表記である。
- <sup>5</sup> ターリバーン (taliban) = 神学生達。アラビア語 talib (ターリブ = 神学生) のペルシャ語風複数形。
- <sup>6</sup> Mullah Muhammad Umar ムッラー・ムハammad・ウマル